



北海道・私立  
札幌創成高校

## 指導体制の構築

# 「SOSEI システム」で 生徒の帰属意識を育み 国公立大合格を目指す

◎2005年度から3年間、文部科学省教育改革推進モデル事業の指定を受ける。校訓は「寛而栗（かんにしてりつ）直而和（ちよくにしてわ）恵而信（けいにしてしん）」。S選抜コース、特進コース、国際コース、総合コースを擁する。また、部活動にも力を入れ、女子バスケットボール部がインターハイ出場を果たす。

### 設立

1963(昭和38)年

### 形態

全日制／普通科／共学

### 生徒数

1学年305人

### 11年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、小樽商科大、室蘭工業大、釧路公立大、公立はこだて未来大、弘前大、高崎経済大、東京学芸大などに17人が合格。私立大は、北海学園大、北星学園大、東洋大、東海大などに延べ131人が合格。

### 住所

〒001-8501  
北海道札幌市北区北29条西2-1-1

### 電話

011-726-1578

### Web Site

<http://sosei.jp/>

## 変革のステップ

### 背景

◎特進コースとしての一貫した指導体制がなく、力のある生徒を伸ばし切れなかった

STEP 1

### 実践

◎入学時の合宿研修、朝学習、週末課題、模試の徹底活用、勉強マラソンなどコース共通の取り組みを行い、体系化

STEP 2

### 成果

◎国公立大合格者が増加。生徒が学校に誇りを持つようになり、保護者の信頼感も高まった

STEP 3

過去最高の実績でも  
「生徒の力を伸ばしきれなかった」

2006年度の特進コースの卒業生は、札幌創成高校創立以来、最多の国公立大合格者数を記録した。この成果にもろ手を上げて喜ぶ教師もいたが、当時教務部にいた渡辺祥介先生の表情はさえなかった。

生徒の入学時の学力から考えれば、もっと力を伸ばせたのではないか……。これが、渡辺先生や一部の教師の実感だった。事実、模試の結果を振り返ると、入学時から学力を堅調に伸ばせた生徒はごくわずか。「もっと高い志望を実現させられたのではないか」という思いが渡辺先生の心に湧き、卒業していった生徒たちの顔が浮かんで消えていった。

「当時の最大の課題は、指導体系が確立していないことでした。学校や特進コースとしての目標や指導方針がなく、学年や教師が独自に取り組んでいる状況でした。そのため、ある学年の取り組みを他学年ではしていないなど、指導が共有されておらず、学年やクラスによって進路結果にばらつきが出ていました。良い取り組みを整理・統合し、どの学年でも生徒の希望進路を実現できる指導体制を構築しなければならぬと感じていました」  
(渡辺先生)

課題を感じていたのは、渡辺先生だけではな

い。数学科主任の西根孝律先生はこう話す。

「本校の生徒の中には、中学時代に能力を十分に発揮できず、自信を持ってないまま入学してくる者が少なくありません。彼らの抱える不本意な気持ちや不安と向き合い、生徒の可能性を信じて丁寧に教科指導や進路指導を行うことで、学力や意欲はもつと向上するはずだと考えていました」

改革の必要性を痛感した渡辺先生は、ファイナンスシステム(\*)のデータを使い、生徒の学力を入学時から伸ばせていないことを示して、指導体系の確立の必要性を訴えた。実際、データを見れば、成績上位で入学した生徒でも「家庭学習時間0時間」などと答えている状況で、学力が伸びていない理由は明らかだった。



札幌創成高校  
将口卓 Shoguchi Takashi

教職歴、同校赴任歴共に21年。進路指導部長。「創成に来て良かった」と卒業式で言ってもらえるよう、あらゆる努力をしていきたい」



札幌創成高校  
西根孝律 Nishine Takanori

教職歴、同校赴任歴共に18年。情報システムセンター長。数学科主任。「教師はエンターテイナーであるべき。授業の価値を伝え続けたい」



札幌創成高校  
渡辺祥介 Watanabe Yoshiyuki

教職歴、同校赴任歴共に9年。特進選抜センター長。「受験勉強は大学での学習の導入と位置付けて指導する」

06年度卒業生の指導に対して反省点を持つていた教師たちは、この呼び掛けに共鳴し、特進コースの改革に向けて動き出した。

### 事前・事後の手厚い指導で 模試を徹底活用

国公立大合格——これが特進コース改革で掲げた目標だ。それまでほとんど志望者も合格者もいなかった国公立大を目標としたのは、5教科7科目を学習させる必要性を感じていたからだ。進路指導部長の将口卓先生はこう語る。

「生徒は、ともすれば苦手科目を捨てたり、「入れるところですよ」という消極的な進路選択をしがちです。しかし、生きていく中で、苦手なことから逃げ続けることは出来ません。大学進学後にも必要な総合的な学力を身に付けさせることが特進コースの使命だと、この目標によって明確に示しました」

07年度には教務部、進路部、特進コース担任から成るプロジェクトチーム(08年度からは特進選抜センターという分掌)を立ち上げ、「自主学习の出来る体制」「きめ細かな進路指導」から成る「SOSSEIシステム」の確立に向けた取り組みを始めた。各学年で効果を上げている取り組みを整理して体系化し、朝学習、週末課題など出来るものから導入した。これまでに力を入れたのは模試の徹底活用だ。これまで

も模試は全員受験だったが、当日になって休む生徒、数学が入試科目にないからと途中で帰る生徒などもいた。国公立大を目指す以上、模試は挑戦の場として欠かせないことを認識させ、本当の意味での全科目、全員受験を徹底した。

また、事前・事後指導の充実も図った。模試の1か月前に「模擬試験事前準備シート」を配布し、模試に向けた学習計画を立てさせる。担当がチェックし、計画の立て方や学習の仕方、内容などをアドバイスする。更に、授業や補習で模試の過去問に取り組ませ、意識付けを図る。事後指導は更に綿密だ。結果返却のタイミングで(3年生は自己採点后)、「模擬試験自己分析シート」を配布(P.22図)。各教科の課題や学習上の悩みを書かせ、それに対する具体的な学習方法のアドバイスを教科担任に記入してもらう。「出来なかった」など感想だけの生徒には指導をしながら、書き直しをさせる。生徒の自己分析力を高めつつ、具体的な弱点克服の学習に結び付けることを狙いとした。

他に、全教科で「復習ノート」を提出させる。単に問題を解き直して満点答案を作るだけでなく、模試の問題を徹底して活用するという観点でノートを作る。例えば、国語なら評論文は全て要約を書き、古文は品詞分解や現代語訳を行う。数学は模試受験時には選択していない問題にも取り組ませ、時には別解を書かせて上位層の意欲を喚起するという。「復習ノート」は

\*進研模試や進路マップのデータを基に、個々の生徒の成績の特徴や学年の状況把握につなげられるシステム

## 入学直後の宿泊研修で生徒の居場所をつくり、帰属意識を高める

どのような取り組みも、生徒自身がその必要

生徒の基礎学力定着を促すだけでなく、教師の指導改善にもなる」と、西根先生は話す。

「最初の模試では解答・解説を写すだけの生徒もいますが、こういう生徒に『復習しなさい』とだけ言っても効果はありません。ノートから、生徒がいかに復習の仕方を分かっているか、どれだけ内容が定着していないかを見取り、指導改善に生かします」

図 「模擬試験自己分析シート」

模擬試験自己分析シート				
1年 組 番 名 前				
模擬試験名 進研総合学力テスト 1年生7月記述模試 (H22.7.10実施)				
	国数英	国語	数学	英語
得点				
自己採点	差			
全国SS	GTZ	58.2	A3	B1
校内順位				
志望校		目標偏差値	目標GTZ	
〇〇高校		64	A2	
各教科の課題点や学習上の悩みなど	教科担任コメント			
国	『志望校の欄は、担任が指導して固めさせていく』			
数	『各教科の結果には教科担任がコメントをし、生徒に返却する』			
英	『英語はいい。模考はいい。』			
理	『物理はいい。100%成績55%。理由は課題がわかっていいから。今日は中学2年生の教室、油断はしないように。』			
その他				

模試が終わると、まず自己採点を行う。約1か月後、模試の結果が返ってきたら、自己採点と得点を比較して差を記入。更に、各教科の課題を自己分析し、学習での悩みを書き込む。それに対し、教科担当はそれぞれアドバイスを書いて、生徒に返す。生徒のコメントで気になることがあれば、返答や励ましを書き込むこともあるという。

\*資料は2010年度1年生のもの。学校資料をそのまま掲載

性を感じなければ効果は上がらない。教師が意義を理解した上で、生徒の取り組みへの納得感を高めることも必要だ。

「全ての取り組みには『価値』が必要です。教師が何を言っても、生徒が価値を見い出さなければ耳には入りません。形ばかりの活動を行うのではなく、なぜ必要なのか、生徒の進路実現にどうつながるのかを理解させ、価値を感じさせることが大切です」(西根先生)

入学直後の宿泊研修で特進コースの取り組みの価値を伝えるのは、そのためだ。学習の仕方、模試ノートの作り方などを教え、実際に2、3時間、自習をさせて高校での学習を体感させる。

また、宿泊研修や1年生導入期に実施している放課後補習は、学習習慣の定着だけでなく、生徒の居場所をつくりたいという狙いもある。北海道では公立高校の人気が高く、私立校は併願校と位置付けられることが多いため、生徒の中には「本当はここに入學したくなかった」という本意な気持ちから学校生活に前向きにならない生徒がいるからだ。

「導入期には、『学校にいて楽しい』という気持ちにさせる必要があります。放課後補習では、最初は効率的に学習できている生徒ばかりではありません。しかし、みんなが学習することによって、学校に自分の居場所があることを認識させ、学校への帰属意識を育み、生徒の顔を学校に向けさせることが何よりも大切だと考えています」(渡辺先生)

## 「第1志望届」の作成でモチベーションをアップ

導入期指導に次いで節目となるのは、2年生後半だ。入試に向けて目標を定め、受験生としての自覚を持たせたいこの時期に活用するのが「第1志望届」だ。これは、第1志望の大学・学部・学科を記入し、志望理由と決意表明を200〜300字で書き、保護者のコメントをもらって提出するというもの。12月末に用紙を渡し、提出の締め切りは1月末だが、1回目の提出で担



任に受理される生徒はほとんどいない。志望理由が明確でない、将来就きたい仕事から考える別の進路もあるなど、何度も志望届をやり取りし、志望を固めさせる。担任が了承した志望届は、学年主任、特進選抜センター長、進路指導部長を経て、教頭、校長へと届く。生徒にそれだけの覚悟を持って志望を貫いてほしいという思いと、全ての教師が一人ひとりの生徒を見守っているというメッセージを込めている。

入試に対するモチベーションを高めることが第一の目的だが、冬休みの宿題として課し、保護者との対話を促す狙いもある。

『第1志望届』を見て、初めて子どもの志望や将来の展望を知る保護者も多いのではないだろうか。3年生になってから『北海道から出られない』といった話になると、混乱するのは生徒です。事前に家庭の中ですり合わせをして、入試に向けて共に頑張っていく環境づくりを行うことも、進路指導に欠かせないポイントです」(西根先生)

ただし、第1志望を意識させ過ぎると、生徒の視野が狭くなる可能性もある。生徒の意識が偏らないよう、2年生での模試の志望校記入欄には必ず第4志望まで書かせるよう指導している。その際、第1志望しか決まっていない生徒には、北海道内の大学、道外の大学、国公立大、私立大をバランス良く記入させる。

「第1志望に固執し過ぎると視野が狭くな

り、入試に必要な科目は切り捨てるという意識につながりかねません。最終的に第1志望に届かない時でも、すぐに心の切り替えが出来るように志望を広く考えさせておくことも、一方では必要です」(渡辺先生)

## 「勉強マラソン」で自律的な学びに向かわせる

改革の成果は入試実績にも表れている。07年度卒業生は11人、08年度卒業生では16人だった国公立大合格者は、改革1期生が卒業した09年度、28人に増加した。生徒の学力の伸びを実感するにつれ、当初は改革に後ろ向きだった教師も前向きに取り組むようになった。生徒の変化が教師の心にも火をつけたのだ。だが、何よりの成果は、生徒が学校に誇りを持ち始めたことだ。

「かつては、恥ずかしくて学校名を人に見えないという生徒もいました。これは生徒にとって不幸なことであり、我々教師としても無力さを感じずにはいられないことでした。ここ数年で、ようやく生徒が胸を張って学校名を言える学校になったと思います。進学実績の向上に加えて、生徒が学校に居場所を見つけ、学校への帰属意識や教師への信頼感が増した結果ではないでしょうか」(将口先生)

生徒の意欲の高まりを受けて、特進コース以外から国公立大合格者が出るようになったのも

大きな変化だ。コースを超えて生徒が互いに刺激し合い、切磋琢磨する雰囲気生まれているのである。保護者の信頼感も増し、きょうだいを同校に入学させる家庭が増えた。教師にとってはプレッシャーもあるが、逆にそれが指導改善の励みにつながっている。

今後の目標は、生徒に自律的に学ぶ姿勢を付けさせることだ。それを実現させる取り組みの一つとして、他校の実践に刺激を受け、10年度に始めた「勉強マラソン」がある。朝8時～夜8時までの正味10時間、学校でひたすら自習に取り組むもので、同年に2回、11年は4回実施した。希望制だが毎回70～80人の生徒が参加する。初めて参加する生徒の中には、ため込んだ宿題に取り組むだけの者もいるが、回を重ねるにつれ、大半の生徒が自分には何か必要かを考え、自習内容を工夫するようになるという。

「生徒が黙々と自習に取り組む姿を見ると、我々の方が勇気付けられます。同時に、こういう生徒がもっと増えれば本校は更に伸びるのではないかと、気持ちを新たにさせられました。今までは学習習慣を付けるために、一方的に課題を与えるだけでしたが、これからは生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を育み、自ら課題を見つけて学びに向かえるように育てていきたいと考えています。そうすることで、より高いレベルの進路実現が達成できると期待しています」(渡辺先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年2月号指導変革の軌跡「愛知県・私立名城大学附属高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)